

『風と共に去りぬ』(世界文学全集 別巻1・2・3)

マーガレット・ミッチェル著、大久保康雄、竹内道之助訳／河出書房新社

2014年で創立百周年を迎える宝塚歌劇は、宝塚音楽学校（二年制定員40名）を卒業した生徒達のみで構成される5組（雪組・月組・花組・星組・宙組）各80名の独身女性だけの劇団員（宝塚ジェンヌ）により演じられる、歌・踊り・芝居を総合した世界初の“歌劇”であり、ムーランルージュの“レビュー”、ブロードウェイの“ミュージカル”と並ぶ人類最高の総合芸術である。これまで約100名のトップを含む4400名の宝塚ジェンヌが演じてきたこの歌劇は、1500回の上演と通算観客動員数400万人を記録した「ベルサイユの薔薇」（1974年初演）や、1182回の上演で266万人の観客を集めた「風と共に去りぬ」（1977年初演）を始めとして、百年間で計750万人の観客を動員してきた。特に後者は今なお世界中で多くの人に愛されているベストセラー小説であり、映画版の大ヒットでも有名なMargaret Mitchellの名作「風と共に去りぬ」(Gone with the wind) を、宝塚歌劇がミュージカル化したもので、米国唯一の内戦（The Civil War）であり1861年から1865年までの5年間に南北両軍計62万人（比較:第二次大戦では40万人）の同胞の血を流した南北戦争を舞台に繰り広げられる、ドラマティックでスケールの大きい舞台は好評を拍し、五組すべてと各組選抜の合同メンバーによる再演を重ねてきた。2002年には1994年以来12年間レットを演じて最高の男役との評価を得てきた専科の轟悠（とどろき・ゆう）と宝塚歌劇の歴史上最高のダンサーである朝海（あさみ）ひかるがスカーレットを演じて高い評価を得た。そして2014年1月には宝塚始まって以来の美人男役トップの月組龍真咲（りゅう・まさき）がスカーレット・オハラを演じ、轟悠のレットと最高のコンビで宝塚歌劇百周年記念公演の一環として梅田芸術劇場で上演された。

宝塚歌劇「風と共に去りぬ」の粗筋

〔第一部〕スカーレット・オハラは愛するアシュレと結婚できなかつた腹いせに、アシュレの妻メラニーの兄チャールズと結婚するが、間もなく死別しアトランタへやって来た。チャリティーバザーの夜、ダンス相手の女性を競り落とすイベントで、喪中のスカーレットに法外な値を付けた男こそが、レット・バトラーであった。南軍の兵士として出征したアシュレが一時帰還したとき、スカーレットは白い腰巻きのサッシュを贈ると共に自分の想いを告白するが、彼は“メラニーを頼む”

と告げるのみであった。劣勢の南軍に北軍が迫り、アトランタが戦場になったため、スカーレットはアシュレとの約束を守って妊娠中のメラニーらと共に故郷タラへの疎開を決意する。燃えるアトランタの町からスカーレット達を荷馬車で避難させたのはレットであった。その途中でレットは南軍に志願しその場から戦場へ赴く。やがて南軍は敗北。荒れ果てたタラを見て、スカーレットはこの土地を守り抜くと決意する。「神さまが証人だわ。神さまを証人にしてあたしは誓う。あたしはヤンキーなんかには屈服しやしない。どこまでだって生き抜いて見せる。そして戦争が終わったら、もう二度とひもじい思いなんかするものか。そうだ、うちの人たちにだって、ぜったいにそんな思いをさせはしない。よしんば、そのためには、盗んだり人殺しまでしなければならぬとしても、神さまを証人にして、二度とひもじい思いなんかするものか。」^{注1)}

“As God is my witness. As God is my witness, the Yankees aren't going to lick me. I'm going to live through this, and when it's over, I'm never going to be hungry again. No, nor any of my folks. If I have to steal or kill—as God is my witness, I'm never going to be hungry again.”^{注2)}

注1) マーガレット・ミッチェル著 大久保康雄、竹内道之助訳「風と共に去りぬ」、河出書房新社刊世界文学全集別巻2 ミッチェル、p99、1960

注2) Margaret Michelle: “Gone with the wind”, Warner Books, New York, p421, 1993

[第二部] スカーレットはレットと結婚していた。敗戦で無気力となったアシュレを自分の経営する雑貨店に雇っていたが、スカーレットと二人で抱き合う姿を奥様方に目撃されて町の噂になる。激高したレットはスカーレットを強引に2階へ連れて行こうとするが、スカーレットは足を踏み外して転落し大怪我を負う。強い後悔と不安にかられたレットはメラニーに、スカーレットを心から愛していると告げる。メラニーは流産し死期を悟り、スカーレットにレットの真意を告げて息を引き取る。その言葉によってスカーレットは、それをレットへの愛情に気付き彼に告白するが、時既に遅く彼はひとり去っていくのだった。「今は考えまい。考えようとしても、今はとても考えられない。明日、タラで考えることにしよう。明日はまた明日の日が照る。」[“I'll think of it all tomorrow, at Tara. I can stand

it then. Tomorrow, I'll think of some way to get him back. After all, tomorrow is another day.” p1024]

この有名な最後の独白の邦訳では、原文にある“some way to get him back（彼を取り戻す手だて）”という句が、省略されているため、スカーレットはレットと決別し独立した人生をタラで一人歩む様な印象を受ける。これではこの作品は悲劇で終わってしまう。しかし思い込んだら一途に自らの人生を切り開いて行く激しい気性のスカーレットには、あらゆる手管を駆使して愛する男を取り戻すように積極的に努力してゆく人生の方がより相応しいと思われる。原作者もおそらく、ハッピーエンドに繋がる期待と余韻を残して筆を置いたのであろう。

「風と共に去りぬ」はマーガレット・ミッチェルの生涯唯一の作品であり、米国建国以来最高の国民的文学である。それは丁度「源氏物語」、「平家物語」が日本人の感性と思考の形成に寄与した“民族の宝”であるのと同様に、歴史が短い多民族国家である米国人の心を一につにするとともに、“アメリカ人氣質”の存在を世界に印象づけた。

神ならぬ身の“人”がつくった国も、また人と同じく過ちを免れない。広島長崎、ソソミ村、アフガニスタン、バクダッド、シリアでの一般市民虐殺は米国の歴史上の汚点となっている。しかしまた一方ではベトナム反戦運動・環境保護運動・ウォータゲートなど、文明人の理性と良心に突き動かされた地球環境や人権擁護運動もまた同じ米国のなし遂げた功績である。さらに電話、自動車、飛行機、コンピュータ、インターネットなど人類の科学の大部分を産み出し、人類史上始めて月に人を送った米国は、また徳川幕府の鎖国を排して日本の眼を世界に開いてくれたのみならず、第二次世界大戦中の困難な時期にクラーク・ゲブルとビビアン・リー主演の絢天然色映画“Gone with the wind”を世に問い、戦後はGHQを通じて世界ではじめて戦争放棄を詠った日本国憲法第九条の制定を助けてくれた素晴らしい国と言わざるを得ない。

我々はこの古くからの友人を大切にすると共に、またそれ故にこそ、いたずらに事大主義者とならず、幕末の小林虎三郎が火事見舞いに来た河井継之介に「今は何も差上げるものとしてないが、せめてものお返しに貴殿にご意見を差上げよう」

と厳しい意見をした如く、真の友人として友が誤った道に進まぬよう諫言すべきであると考え。レッド・バトラーも以下の様に、南北戦争の本質を見抜き、リンカーンの「奴隷解放」という正義の御旗の陰に潜んだ人の醜さをえぐり出している。

「戦争をしているばかりに、雄弁家どもがどんな景気のいい標語をあたえようと、どんなに崇高な目的をこじつけようと、戦争にはただ一つの理由しか絶対がありません。それは金銭です。戦争はすべて実は“金の奪いあい”です。けれども、それを悟っている人はほとんどいません。彼らの耳は、太鼓やラッパの音、銃後にあつてただ大言壮語する雄弁家どもの美辞麗句などでふさがっているのです。景気の良い呼びかけが「キリストの墓を異教徒より救え！」となることもあれば、「ローマ法王を打倒せよ！」となることもあり、時には、「自由のために！となり、また「綿花、奴隷制、州権のために！」となることもありますね」^{注3)}

注3) マーガレット・ミッチェル著 大久保康雄・竹内道之助訳「風と共に去りぬ」、河出書房新社刊
世界文学全集別巻1 ミッチェル I、p289、1960

日本国憲法前文第一段には「われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。」と宣言している。人類の福祉のためにのみ存在する工学を担う若きエンジニア達も、「風と共に去りぬ」の中で“正義の戦争など存在しない”ことを主張したミッチェルの人間愛と叡智を学んで欲しいと願う次第である。

執筆者紹介

福本 一郎

生物機能工学専攻教授（平成27年3月退職）。専門領域は、医用生体工学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『風と共に去りぬ』 Margaret Michelle著 大久保康雄、竹内道之助訳 河出書房新社（世界文学全集 別巻1 - 3）1961年 品切

『Gone with the wind』 Margaret Michelle著 Warner Books 1999年 品切

[ブックガイド目次へ](#)